

## 私にとってのポーランド

川染 雅嗣



1978年7月の初め、私はアンカレッジ、ハンブルグを経由してワルシャワ・オケンチェ空港に降り立った。空港には銃を持った兵士が至る所に立っており、安全な日本から来た私にはまさに未知の体験だった。一方で、同年ポーランド人ローマ法王ヤン・パヴェウⅡ世が誕生し、国中が喜びに沸き返っていた。

実は当時私はポーランドという国が東側の世界に属していることは知っていたが、その社会体制が日本とどのように異なるのか、正確には理解していなかった。共産主義、社会主義、資本主義、民主主義という言葉の定義も曖昧だった。ポーランド人の9割以上がカトリック教徒であることも知らなかった。いきなり結論を提示するようで申し訳ないが、2年4カ月に亘るポーランド滞在を経てからの人生は、まさにこれらのイデオロギーや宗教、そして芸術と人間本来の生き方の関係についての研究に費やされてきたといっても過言ではない。

音楽の話から始めよう。同年10月、私はワルシャワ音楽院(現ショパン音楽大学)研究科に入学した。同じ月に(ワルシャワの秋現代音楽祭)が開催され、連日連夜貪るように現代音楽を聴き続けた。この経験は今の大学教員としての仕事にも大いに資するところがあった。昨年度までピアノ演奏家コースの学生たち向けに(20世紀の音楽)と題する講座を年に2回受け持ち、自分が生きていく時代に作られる音楽を聴くことの重要性を訴え続けてきた。この信念はこの時に生まれたのだ。この音楽祭ではキャシー・バーベリアンの生の声を聴き、ペンデレツキと握手し、ルトスワフスキのチェロ・コンチェルトの世界に完全に魂を奪われた。ルチアーノ・ベリオのシンフォニエッタはまるで別世界の音楽に聴こえた。

ワルシャワ音楽院での師匠はカジミエシュ・ギェルジョド教授だった。当時相愛大学の客員教授でもあり、日本にも度々来られていた。先生には自由にさせて頂いたと思う。好きなように音楽を解釈し、好きなように演奏していた私の拙く底の浅い演奏もまずは褒めて下さった。ただその後が手強かった。「Bardzo dobrze 大変良い」と2回ほど繰り返したあと「Alleしかし」で始まる指導がなかなかのものだった。ただ、日本でのレッスン体験と異なり、まずは生徒の拙い演奏も受け入れた上で、伝統的な音楽表現法を諄々と説く様は新鮮で、その姿勢は今の自分にも確実に受け継がれていると思う。現在の私の指導法の基礎はワルシャワ時代に築かれたのである。

先生のクラスにはユニークな学生が多くいた。ある学生はいつも先生と演奏法やテクニックについて延々と議論を繰り返していた。ポーランド語がまだあまりよくわからない私でも、先生と彼の間で妥協点を見いだすのは難しそうに思えた。彼が帰った後先生はホッとした表情で「ホッホッホ、彼は哲学者だからね」と言って笑った。こんな光景は日本では見たことがなかった。

1979年だったか、私はオシフィエンチム(アウシュビッツ)を訪れた。ナチスの負の遺産だ。正視出来ない記録映像を観た後、一通り施設を見学して歩くうちに気分が悪くなってきた。収容所の入り口に掲げられた(ARBEIT MACHT FREI 労働で自由を)という悪魔のささやきのような言葉も欺瞞的だった。ガス室や焼却炉も目の当たりにした。ホロコーストは歴史上の事実として知ってはいたが、現場に足を踏み入れてみるとその現実感は一瞬のものではない。

偶然、私は大学4年の時NHKで放映された(QB7)という連続テレビドラマを観ていた。原作者は米国のユダヤ系作家、レオン・ユリス。彼は『栄光への脱出』の原作者で『OK牧場の決闘』の脚本家としても知られている。アンソニー・ホプキンスという俳優もこのドラマで知った。一種の法廷劇で、ホロコーストをテーマにしたあるユダヤ人作家の作品で、強制収容所で人体実験を行ったと告発されたポーランド人医師の名誉回復の物語である。このドラマとオシフィエンチム訪問によって、私はユダヤ人問題により強い関心を持つことになったのである。

そのうち1980年になり、ヴァウエンサ(ワレサ)議長率いる「連帯」の運動が始まった。その年に予定されていた第10回ショパン国際ピアノコンクールの開催が危ぶまれ、ハンガリー動乱やプラハの春のことが頭をよぎったが、コンクールは無事開催され、北ベトナム出身のダン・タイ・ソンが優勝した。

それから42年経って、今度はロシアのウクライナ侵攻である。一体世界はどうなっているのだろうか。世界の首脳たちは異口同音に平和を唱えるが、一向にこの世界から紛争や戦争、飢餓はなくなる。SDGsだって欺瞞に思えてくるのは私だけだろうか。

このような混乱した世界で音楽を追求する意味はどこにあるのか。その探求は冒頭の結論じみた言葉と相まって、今でも私の中で続いているのである。

(かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授、会員)